

過去の自分を許し、未来の自分を信じる

奨励	古森 敬子【こもり・けいこ】
奨励者紹介	左京キリスト教会牧師

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。」

(マタイによる福音書 7章1—2節)

世界で一番大切な存在

皆さんは嫌いな人がいますか。顔も見たくないし、一緒にいると不愉快になるのでできれば避けて通りたいような人です。私は牧師ですが、大嫌いな人がいます。できれば顔を見たくないし、同じ場所にいたくありません。しかし、その人は今この礼拝堂にいます。

どうして私がおかしいのかと、その人は私の物心つく時から一緒にいて、私のことを何でも知っているからです。私の内側にある、人に知られたくないこと、隠しておきたいことを全部知っていて、知ってるよ、という顔で私を見るからです。できれば私はその人から離れて、嫌なこと、隠しておきたいことなど、なかったことにしたいのですが、しかしその人はいつも私のそばについてきます。まるで影のように、私の行くところにはどこにでもついてきます。できればどこかに行ってもらいたいです。

と、ここまで言うと、その大嫌いな人というのは、自分自身のことだということが皆さんにもお分かりいただけたことと思います。しかしこの自分自身、大嫌いでもあるのですが、その反面、世界で一番大好きな存在でもあります。嫌な存在、隠しておきたいような存在でもあるのですが、同時に人から認められたい、よりよい評価を得たいという存在でもあります。つらく苦しい目には遭いたくない、いつも気持ちよく安らかなところに置いてあげたい、とても可愛く、世界で一番大切な存在でもあります。

自分を傷つける意味

数年前の大学在学中、明德館地下に生協があったのですが、そこで一人の女の子が何かの受付のアルバイトをしていました。その受付に座り、暇そうにしていたのですが、その女の子はおもむろに自分の腕を剃刀で切り始めました。目が点になりその光景から目が離せなくなりました。二の腕からは血が一つと流れ、彼女は切るのをやめてその血をふき始めました。私は心臓がバクバクしながらも、その女の子に近づき、大丈夫ですか、と声をかけました。もし何か話したいことがあったらメールしてね、と言って、大学のメールアドレスを書いて渡しました。後日彼女から、たくさんの方があの場を通り過ぎて行ったけれど、声をかけてくれたのはあなただけだった、というメールが届きました。

自分という存在が大嫌い許せないから自分自身を傷つけているのか、また反対に、そんな自分を見てほしい、誰か私の存在を分かって、と思って人目を引く行為をしているのか、きっとそのどちらかが本当のものではないかと思えます。彼女の心はきっと傷だらけで、しかしその心の傷は他人からは分からないので、外側からも彼女が傷ついていることが分かるように、大勢の人がいる前で自傷行為をしていたのかもしれない。専門家ではないので分かりませんが、人は自分自身を大嫌い傷つけて苦しめたいと願いつつ、それと同じくらい自分が大好きで、人から愛されたい、認められたいと願う存在なのだとすることに気づきます。

消し去りたい過去の自分

大嫌いな自分とは過去の自分ではないでしょうか。本当は自分の過去を消してしまっただけで頭の記憶からなくしてしまいたいのですが、それは不可能です。昔の嫌な記憶は徐々に薄れていくとどこかで聞いたことがありますが、しかし、本当につらく苦しい思い出は薄まるどころか、時にフラッシュバックと呼ばれる強烈な映像でよみがえり、自分の心の傷を再び開け、傷に塩を塗り込みます。もう過去の嫌な思い出からは逃げられないのか、心の傷は癒されることはないのか、そう思うこともあります。

パウロが、ダマスコ途上で復活のイエスの光に出会い、クリスチャンとなった後、彼は大変身し、ただ福音の宣教にのみ命を捧げます。しかしたとえ大変身を遂げたとしても、彼は昔自分が犯した殺人の過去を忘れることはなかったのではないのでしょうか。使徒言行録7章に、ステファノというクリスチャンがユダヤ人たちによって殺される場面が描かれています。パウロはその場に居合わせ、ステファノが殺されることに賛成していました。

キリスト者を追いかけて迫害していたパウロは、ダマスコに行く途上で復活のイエスに出会い、回心してクリスチャンになりました。では、回心し迫害から宣教へと新しい人生を歩み始めたパウロは、昔の犯した罪をなかったこととしてクリスチャンとして歩み始めたのでしょうか。決してそうではなく、彼はステファノが殺された時に、自分は直接石を投げなかったとしても、同じ思いでそこにいたこと、そしてそれは自分も石を投げた人殺しなのだとすることを決して忘れなかったのではないのでしょうか。

惨めな人間

自分が大嫌い、どこかに行ってくれればよいと思うと、初めにお話ししました。人生を振り返ると、自分の欠点がクローズアップされ醜く耐えられないことがあります。若い時、あの人にあんなことを言ってしまった、こんなことをしてしまった、そういう小さなことが思い出されてとても恥ずかしく、思い出しながら穴があいたら入りたくなくなります。自分勝手に、見栄っ張り、そのような自分のことは棚に上げて、人の欠点ばかり目について、他者を裁いていた自分がいます。また、あの人がいなくなればよい、と思ったことなども思い出されます。心に思ったことも罪を犯したことになる、とイエスは言われましたが、本当にそのとおりだと思います。あの人がいなくなればよいのに、と思った時、心の中で殺人の罪を犯し、そして私なんかいなくなればよいのに、と思った時、自分を殺すという罪を犯していました。おかげさまで、本当に殺人は犯さなくて済みましたが、自分が他者の存在を消してしまいたいと願ったことは、自分にとって殺人罪を犯したのと同じでした。

私はこの過去を死ぬまで忘れることなく生きなければなりません。それは、それまで正しく信じてきた自分という存在が決して正しくはない存在であることを知ることであり、世の中で、最も惨めで罪深い存在が自分であることを知ることでありました。パウロはローマの信徒への手紙の7章24節で「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう」と言っていますが、それは、たとえ新しい命を生き始めたとしても、やはり過去から解放されることなく生きねばならないすべての人間に当てはまる言葉ではないかと思われま

苦い経験からの出発

しかし、その忘れることのできない過去の苦い経験はまた、人に成長をもたらせてくれます。悪いことをした女を石打の刑で殺そうといきり立つユダヤ人たちに、イエスが、あなたがたのなかで、罪を犯したことはない人が最初に石を投げなさい、と言った時、老人から始まり人々はそこから立ち去った、と書かれています。人生を重ねるにつれ、自分がどれだけたくさん罪を犯してきたかを自覚できるからこそ、また自分には人を裁くことなどできないということを真に知ることができるのです。

過去の罪を許さず新しい道を歩み始めること、それが、神が私たちに与えてくださる許しです。それは新しい道という未来を神が与えてくださることを、私たちが一緒に信じることではないのでしょうか。過去という罪は消えてなくならないけれど、しかし私は許され、今生かされ、そして一歩先という未来が与えられているのです。未来とは若い人たちだけにある言葉ではなく、死ぬ直前まで、生かされている間私たちすべてにある希望です。

マイナスからのスタート

パウロは迫害する者から宣教する者へと変身し、新しい道を歩み始めました。私は、人生の半ば以上が過ぎ去った50歳を目前に離婚し、逃げるかのようにイギリスの聖書学校に行きました。そしてそこで示された神の恵みに応答する人生へ進むため、帰国後同志社大学神学部に入りました。人から見ればそれは残された人生の有効活用のような短い未来でしかないかもしれませんが、私にとって毎日が死から命へ、過去から未来への新しい歩みでした。

生き方の変換に遅すぎるということはありません。そして神によって与えられる新しい人生は、決してリセットされたゲームのような人生ではありません。私は離婚して牧師になって人生をリセットして、新しい人生を歩み始めたわけではありません。神にある新しい人生とは、過去のマイナスをしっかりと胸に抱いて、それを自分の糧として人を裁かない人生をスタートさせる人生です。

過去を許され

裁くな、自分が裁かれたいのである、と聖書は言いますが、過去の自分のマイナスを知っている人は、他人を裁くことはできません。人を裁くことができるのは神だけであること、その神に裁かれるべき自分が、裁かれることなく許され、愛によって生かされ、新しい人生をいただいたことを知っているからです。そしてつい人を見て裁きたくなる私に、他人の奴隷を裁くお前は誰だ、と神は言われます。この他人の奴隷とは、私にとって他者であり、また私自身です。人を裁くことをしてはいけないように、自分自身をも自分で裁いてはいけないのです。

未来を信じて

私たちは、神様がくださった明日に向かって新しい歩みをしなければなりません。それはゼロからのスタートではなく、マイナスからのスタートです。その過去のマイナスがあるから、頭から離れず私を苦しめたマイナスの思い出が、今の糧となって、私に神の愛とは何か、謙遜とは何か、裁きとは何かを教えてくれているような気がします。すべての人に与えられているこの神の愛に感謝し、新しい一歩を踏み出したいと願うものです。